二〇二三年度 宮城県 仙台第二高等学校 同窓会入会式

挨拶

宮城県仙台第二高等学校同窓会・会長の佐藤一郎です。今日は、わたくしの略歴をも交えて、わたくしと、仙台二高同窓会との関わりをお話してみようと思います。

今から六〇年ほど前、一九六二（昭和三七）年、私は宮城県仙台第二高等学校に入学しました。どちらかというと、数学が好きで、矢野健太郎の『代数入門』、『初等解析幾何学』を毎日コツコツ一頁ずつ読み込んでいました。一方、美術部に入り、美術教師二宮不二麿さんのもとで水彩画、油画の手ほどきを受けました。東北大学工学部を受験するのか、東京藝術大学油画専攻を受験するのか、二年次の後半に志望校を決めなければならず、二宮さんの強い奨めもあり、三年次に理科系から文化系のクラスに替えることにしました。と同時に、応援団副団長に懇願され、引き受けることにしました。

その結果、阿部次郎の『三太郎の日記』などの文学書、須田国太郎の『近代絵画とリアリズム』などの美術書を読む時間もできました。石膏デッサン、人物油画の修練に励み、一年浪人して、東京藝術大学油画専攻に入学できました。その後、修士過程、研究生を経て、ドイツ学術交流会（ＤＡＡＤ）留学生として、ハンブルグ美術大学に在籍しました。四年後に帰国し、東京藝術大学油画専攻の非常勤講師、博士課程を経て、一九八一（昭和五六）年、常勤講師となって、文部教官になりました。

東京における同窓会活動には、東京新宿での在京仙台二高同窓会懇談会「北杜会」（主宰：青山史朗、会場：住友クラブ、一九七五（昭和五〇）年九月から始まる）があり、一九八四（昭和五八）年五月、第七一回「洋画の技法について」と題して、わ

たくしは講演しました。年配の方々が多く、まだ若かったせいか、しどろもどろであり、冷や汗をかいた覚えがあります。同時期、仙台二高校舎が新たに新築されることになり、その記念に、陶壁画『菩薩と修羅』を制作しました。当時の仁科博之校長が東京上野の東京藝術大学にお越しになり、壁画制作を依頼されたのです。わたくしは、生徒であった高橋弘勝さん（第三七回生）が描いた、彼自身の心の中にある「母なるもの」と「父なるもの」との葛藤がテーマになった水彩画を原案とし、制作しました。新校舎落成記念式典には、堀田康哉同窓会長をはじめ、わたくしが在籍当時の小圷洋校長、堀身英学塾の堀見宗男先生の元気な笑顔を拝見し、懐かしいと同時に、嬉しかったことを思い出します。

その当時、仙台二高東京同窓会総会は、橋本保雄ホテルオークラ副社長が先導しており、そこの大宴会場で行われ、それはそれは盛大なものでした。

創立百周年記念事業シンポジウムが二〇〇〇（平成一二）年九月十四日（木）に開催され、創立百周年シンポジウム「二一世紀の日本―若者に贈るメッセージ―」と題して、西澤潤一（岩手県立大学学長・中四四回生）、阿部博之（東北大学総長・高七回生）、佐藤一郎（東京芸術大学教授・高一七回生）、浅野史郎（宮城県知事・高一八回生）の四名がパネリストとなり、コーディネーターは、佐藤隆輔（元ＮＨＫアナウンサー・高五回生）でありました。

このように、昔日の日々を振り返ってみると、仙台二高とは少なからず交流があり、わたくしは大変お世話になってきたのです。東京藝術大学教授を定年退職後、五年間、金沢美術工芸大学大学院専任教授を務め、その後、郷里仙台の東北生活文化大学に美術学部が新設されるに伴って、学長となって戻ってきました。現在、五年目が終わろうとしております。

油画を描く人生に憧れて、東京へ出て、ドイツに留学し、画家として、絵

画研究者として、絵画教育者としての歩みを重ねてこれたのも、仙台二高という素晴らしい環境に育まれたからです。現在、少しでも、その御恩に報いたい気持ちでいっぱいです。

このような壇上から、ご挨拶をすることになろうとは、夢にも思わなかったわたくしですが、みなさんも、同窓会入会式を起点に、末長く宮城県仙台第二高等学校同窓会を見守り、同窓会を盛り立てていただきたいとの願いをこめて、挨拶にかえさせていただきます。

令和六年二月二九日

宮城縣仙臺第弐高等學校同窓會

會長　佐藤一郎

註1　「往昔、此御山を、二荒山と書しを、空海大師開記の時、日光と改たまふ。千歳未来をさとり給ふにや、今此御光、一天にかゝやきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖、穏也。猶憚多くて、筆を差置ぬ。あなたふと青葉若葉の日の光」

佐藤一郎